

鄒城市鐵山「大集經」題刻と「石頌」の研究

鐵崖相川政行

序

一九八九年に初めて鐵山摩崖を実見してより、既に一四年が経過した。その間、一九九〇年に当地で国際会議、山東省摩崖石刻等の學術討論会があり、私も参加し「鐵山摩崖匡喆經頌不明字の研究」と言う題で発表した。その後一九九二年、広島文教国文学第二十八号の塚田康信教授退官記念号で、鄒縣鐵山摩崖の「經文と匡喆刻經頌の一考察」として小論を発表した。また二〇〇二年八月再度山東省濟南で「山東北朝摩崖刻經考察與檢討」という国際學術討論会が開催され参加し、「鐵山摩崖と石頌の考察」という題目で口頭発表した。さらに今年二〇〇三年六月京都女子大学において「鐵山摩崖・匡喆刻經頌の研究」という題で研究発表をした。主に「石頌」、則ち「匡喆刻經頌」の積文考察に関わるものであるが、文教国文学誌の論は当然、大集經の穿菩提品にも関わる經文確認も行ったものである。

昨年の中国学会での鼓山、雲翠山、洪頂山、泰山經石峪、鐵山(図表一参照)の再度の実査研究により、この經文佛号等を書刻した安道壹教団の広範な地域活動に驚嘆し、そのパワーに圧倒されたものであった。当然このグローバルな領域の一環として各地に点在する摩崖群を実地踏査し、それぞれがまったく独立したのではなく、相互に関連するものであると再確認したものである。

しかし、研究は精密に細部に亘り調査研究されなければならない。鐵山摩崖一つをとってもそれが重要であるの言うまでもないし、また鐵山摩崖はこれら諸山中最大規模であり、鐫刻された当時は完好なもので、他を圧倒し、安法師の代表的經文書刻と言えるのではないか。これを研究する意義は極めて大きいものと思われる。

この夏は新型コロナウイルス・サーズの影響もおさまり、再度の鐵山諸刻状況を実測し調査研究できたので、今回は標題の通り、次の項目を以て論述していきたく思う。

(一一)

一 鐵山諸刻の実地踏査とその考察

- 1 大集經題刻について
- 2 海慧菩薩品穿菩提心經文
- 3 石頌題刻と頌文(匡詰刻經頌)
- 4 安道志署經題目
- 5 龜趺線刻

二 石頌の考察

- 1 全文釈文とその表解
- 2 不明字の検討
- 3 釈読論考

三 結 論

四 参考文献

一、鐵山諸刻の实地踏査とその考察

1 大壘經題刻について

この「大壘經」の三字は、この鐵山諸刻中最大の大きさの鐫刻である。先ずこの三字は、二重、三重又は四重の界線を以て、その中におさめられている。特に右側縦の界線が三本確認できる。下部横線は不明。三字ともすべて双鉤の線であったようである。極めて風化漫漶が激しい。特に文字の右方は三字とも文字の痕跡を何も残してはいない。

○大字は第二画目の撇法、掠法の先端がころうじて判識できる。筆の先鋒がわれていて五本の線が、縦の線上にはみだした様に表現されている。また縦横の界線について記せば、縦線はほぼ二・八五m、横の外線は二・一mで、字間の横線は二重線である。一字の高さはこの縦内ほど二m中にある。

○壘字は佳が三つ書かれた『説文』の篆字体であり、壘の第一画が長く伸ばされた表現で、縦線上にその撇法最終部が残されている。鐵山摩崖全体の最下部、東嶺安道壹署經の一行もすべて縦横二重界線中におさめられているが、東嶺の二字の撇法がやはり縦線上にあって界線をはみ出す様に長い呼吸で引かれていて面白い。大や壘の撇法と同じ様に表現されたものと思われる。壘字下部「木」の縦線が太く（岩皮のその部は既にはがれる様に風化しているが）双鉤線の痕跡が認められる。おそらくは字の中心であろう。三字の中心線がこれによって読みとれる。

○經字は三字中、最大画数が残されている。大も壘もやや平板の岩盤上に鐫刻されてあるが經字はややもりあがった傾斜のある岩盤上にあるためか、風化をまぬがれたためであろうか、残された部分は經の糸扁上部、「小」の上部が双鉤線で交差し、繁雑になるためか、実画線は細めに幅も狭ましく表現されたものか、対して糸扁の第一画は実に太めの双鉤刻になっている。糸扁下部、小部分や旁部は漫漶して識別不可能であるが、旁上部はかすかに線刻が確認される。

泰山金剛經中終行に近づくにつれ双鉤刻の字が多く存在するのは鐫刻が何かの事情で中断された証しであって、その双鉤は鐫刻作業の未完成を意味するのに対し、この大壘經三字の双鉤刻は鐵山全体中他にも無く、双鉤をもって完成している。尚、又鄭道昭が太基山に「白雲堂」と中・大字の二種を双鉤刻で残している。

2 海慧菩薩品穿菩提心經文(石頌文中には大曇經、穿菩提品と表記されている)

經文は全行十七行であるが、前八行と後九行とに区分されている。最終行は全六字しかなく、前後八行中におさめられなかった六字が十七行めに付け足されるように鐫刻される。六字は後八行の行頭より五・〇五mさげられ、かなり上部に、「石頌」首行三・〇一m上に刻されている。

經文は首行より八行までは寬さ五・四mで縦三三・六三m内に納められ、八行目より次行九行目の間約一・一五m程つまり經文二行分があげられているのである。これは行頭より行脚まで、まるで全經文を左右に読経、看経する道路の如くに整然とした空間道になっている。この空間路は二つの重要性を帯びていてはいないか。則ち石頌文中に「雙龜下蟠甲負三階之路」と雙龜が三階の路を負うと記されている。前句は「六龍上繞□瑩五彩之雲」とも記され、龍と雲の文様が「大曇經」題刻左右に線刻されているのであるから「三階之路」もこの全体図上に存在しなければならぬ。私はこの路を下りながらこれが誤りでないことを確信したのである。この上の中心真上に「大曇經」題刻の中心にむすびつくよう、ほとんど誤差なく鐫刻されているのである。この雙龜が負う路を辿れば必然的に「大曇經」題刻にあたるのである。因みに「大曇經」の字幅は驚くことに界線幅は二行分ではなく更に前後二行内の幅、前七、八行と後九、十行分上にある。

それにしてもこの二行分の空路の存在はなにか。やはり、經文を足で踏みつけるのは、仏教崇拜上好ましくない。左右の經文を踏まずに下から上へ、上から下に歩行できるためのものではないか。むしろ三階教の意も考察し検討する必要があるが、時代的なズレもある。因みに葛山摩崖の經文もこの空路があると言う。又、經文全文については序文で触れた広島文教国文学第二十八号、修美第四十、四十二、四十三号等の筆者の小論で、既に取り挙げた。

3 石頌題名刻と頌文(匡詰刻經頌)

「石頌」の石字の大きさは巾〇・七六m、縦〇・七二五mで、頌字巾は、〇・七五m、縦は、〇・七二五mである。字間はおよそ一・四六m余りあけられ、頌文七、八行目行頭〇・九m上に鐫刻されている。現在は頌文最終行ぎりぎりに小階段がつけられ、その階段より約一・〇二m離れている。本来は石頌文中央上六、七行の行頭上に書かれ刻されるべきようで、少し左方にずれた位置はそ

こだけを見れば不自然であるが、この鐵山全体の鐫刻を総観眺視すれば、全体的配置は極めて調和が保たれている。寸分の隙のない整然たる実に計画的な配置をもった優れた鐫刻群と言わざるをえない。尚、二字共に方勢の篆体である。

「頌文」は十二行で上部行頭首行より終行までの巾は三・七mである。高さは一二・四mでこれも整然とした配字で書刻されたと言えよう。「頌文」首行初字「觀」字は經文第十六行「法」と「時」字の字間につくようかなり經文に接近しているが、首行最終行脚字は經文と〇・八mほど離れている。十二行全体行脚はほぼそろえられているが、經文のそれより下方一・一m程づれ処置されている。

4 東嶺安道壹署經題名

右については『修美』通卷第四十号で詳細にふれた。題目全文はそれに譲る。今その小論を読むとやや勘違いもあり、誤謬もあるようで、今回の実査、実測で判明したこのみ記しておく。

先ず石頌文十二行下十四・三mの下に少し盛り上がった岩盤がなだらかな傾斜をもって存在する。右側は近年になってから採石のため破断された様である。比較的断石された部分が新しいこととわかる。すると右側首行は既にこの時に破壊されている事になる。それにしても首行前半部分の風化摩滅は激しいが、下部に「那」字の旧字体の部分が判読できる。幸いに「東嶺安道壹(壹)の下部半字(漫漶)署經」が中心に縦横の二重の界線でまるで一字一字原稿用紙を思わせる風情の界線中にある。署經の二文字は砂地にうもれそれをどかせば判読可能である。さらに驚くことにこの「東嶺：」一行の前後が各一行分(右〇・四m、左〇・四五m)あけられている。拓本等ではこれらを見逃しつめてしまうが、この前後各一行分をあげてあることは、二重の界線とあいまって、さらに東嶺安道壹への敬意と人物の重さを象徴する鐫刻と言えよう。実測し解明されたこの東嶺行の前後各一行をあげ、二行の官銜と人名が少しく読みとれる。後半も東嶺行一行あき三行が官銜と人名が刻されている。全体で横幅約三・九m、縦二・六七m中に刻され、ほぼ小巖盤全体を使つての鐫刻と言えようが、最終行下部や左方は岩盤の無刻の余白とされている。

5 龜趺線刻

これは石頌文中に「雙・龜・下・蟠・甲・負・三・階・之・路」とあるによると、二匹が凡そ經文前一〜八行下部と後九〜十七行下部に各一匹ずつ線

刻されていたようである。今はその前者のみがかすかに残る。これは当然一般石碑に見る亀趺に相当するものと考えられる。経文が前半部、後半部と二つに分けられ鑄刻され、単匹では不都合で、後半部にも亀趺を図象化し雙亀で碑を支える型を取ったものと思われる。まったく石頌文と一致するものである。しかし、今日では残念なことに後半行下部にはその痕跡を認めることは出来ない。幸いに前半行下部はよく調査すれば認識できる。亀頭首部分は上に伸び、後足もはっきり線刻されて、静止した亀趺ではなく、なにか遊泳しているようで、頭上部が上方に向いている。いわゆる亀の特徴でもある亀甲則ち甲羅も精確に線刻されているものであった。

二、石頌の注釈考

全文六二〇字（現不明字七六字）十二行から成る四六文である。当時の言わば駢儷文は時代の趨勢であって当然のことであろう。四六文の特質は左の六項目にわたるものを以て成る。

この四六文は四言^①や六言の句とし、対偶^②を用いて、韻^③を押し声朗^④を宜しくし、また、対句を繁用して、典故^⑤を極め典雅にして、莊重性を醸し出すことを特徴とする。ために、美文華麗に流れ、その特質を満すが為に大きな制約を受けるわけで、詰屈^⑥贅^⑦牙^⑧し、晦渋性に豊み難解なものに陥入る欠点を持つわけである。（拙著「遊芸約言評釈」）

この文章も詰屈贅牙し難渋な箇所もあるが、それぞれ典拠やその典故をしっかりと把握すればかなり正確にゆめ、その文章の芸術性が現れてくるのである。また書道金石学の書道的意義が極めて高いものがあると言えるのである。この文章を理解することなくして安法師や経文等の関係を深く観察できない。よって全文を表解したい。全文六二〇字中、風化等で不明字が大変多く全文が解しがた^⑨く、対偶等を明確にして不明字や予想される文字を仮にあてその全文の真にせまりたい。

尚、全文はA～Kの十一段落に区分できよう。本研究はその全文十一段を紙幅の関係上詳解し論考できないので、各段に符合した部分のみ評解し文章上、仏教上、書道金石学的に重要と思われる部分を考察して論述していきたく思う。

1 全文釋文とその表解

(表解例) ^の印は対句と見される。未詳、再考の部分も含む。□は不明字。

Ⓐ

觀下白泡□不澹 清波而易守

赤□□□震 朱光而易滅

(イ)

Ⓑ

是以□□、□子匡喆及弟顯□祖珍
漢丞相衡之苗裔也

Ⓒ

於是乃與同義人李桃、湯□奴等

可謂門抽杞梓

家握芳蘭

颯俞龍登^{△6}
^{△7}
^{△8}

浴然鳳舉

因[?]率邑人敢欲寄泉天沼共汲無竭之隸

□財法肆同□永用之寶

仍割家貲

捨如霜葉

(ハ)

但以四毒結躬^{△3}
八疵縈索骨^{△4}
(ロ)

穢納皆羅

孰有誰无^{△5}

自非體括三乘

身苞十力

詎辯□□之章

鳥^{身?}知救護之品者哉

□棄烏塗而在□
□清散而□府

嘆□□□遷
嗟□□□言□

識地紐方傾
知宏綱尚缺

秀德自天
英姿獨拔

①

在皇周大像元年歲大淵獻八月庚申朔十七日丙子

瑕丘東南大崗山南崗之陽

前觀邾嶧峨峨觀拂□之□

却瞻岱嶽魏眺排雲之嶽

兼復左顧昌巖

右臨車傳駟

表裏山川

林□文□

(三)

②

於是有大沙門安法師者

道鑒不二

德悟一原

匪直秘相咸韜書工尤最

乃請神豪于四顯之中敬寫《大集

經·穿菩提品》九百卅字

道斯勝句

□□拔世

(ホ)

③

遂乃約石圖

模炳常質

六龍上繞□瑩五彩之雲

雙龜下蟠甲負三階之路

縱使崑崙玉謀

□觀金簡

周穆記功

秦皇勒績

今□勝□

譬彼蔑如也

(八)

㊦

釋迦本演之世工□

十二那由他衆生發菩提心

一萬六千天子得無生法忍

況此群英

聯珪共珮

同發善心

採斑倕之巧成斯福業者乎

㊧

從今鑄構逢劫火而莫燒

神□□□對□風而常住

尔其丹青□唯所以圖其盛法

金石長存□□雕之不朽

此嚴不琢□葉何觀？

璋才同返

鷺藻謝歸

猶覽此徵

誠何堪扑躍

㊨

聊措寡豪、以申短韵

乃作頌粵

□□大道

非若□□▲

空來寂住

能卷能舒▲

想□□崖

遠離陷途▲

稱肌代鳥

放鴿殘軀▲

（[△]）

①

— (換韻) —

六度常滿

三空不缺△

(ト)

敢緝遺訓

式彰余烈△

縑竹易銷

金石難滅△

託以山高

永留不絕△

②

— (換韻) —

尋師寶翰

區□□高○

清跨義誕

妙越英絲○

如龍蟠霧

似鳳騰氤○

聖人幽軌

神仙秘法○

從茲瞥相

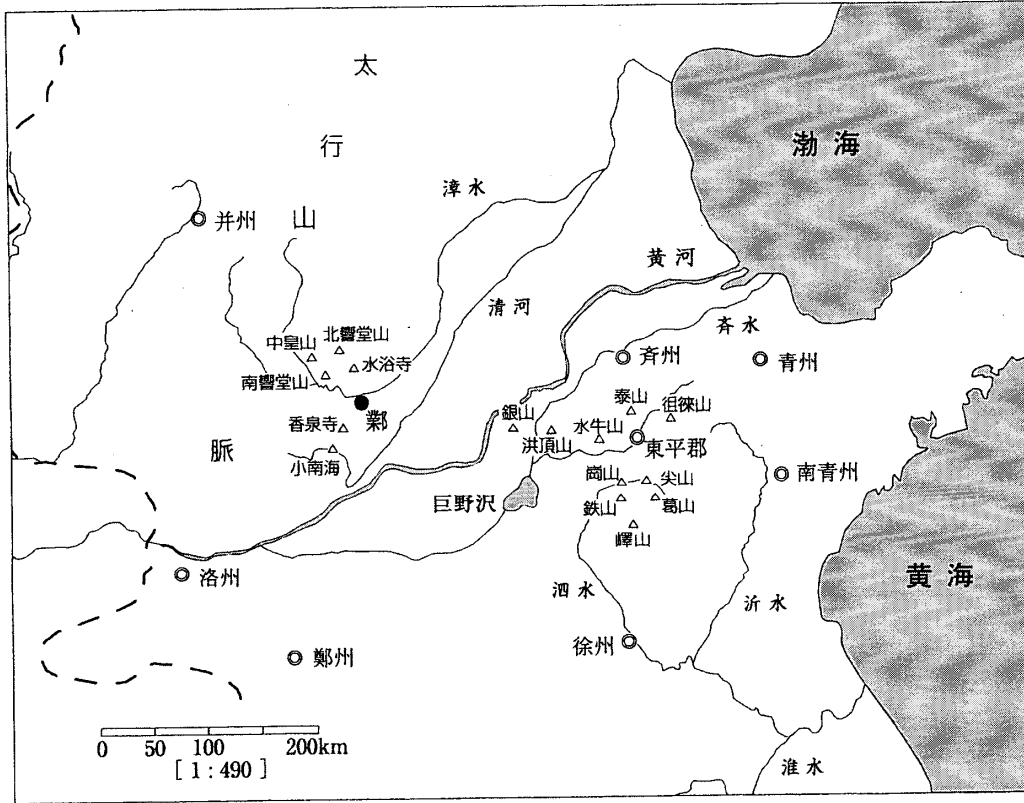
樹標永劫○

(チ)

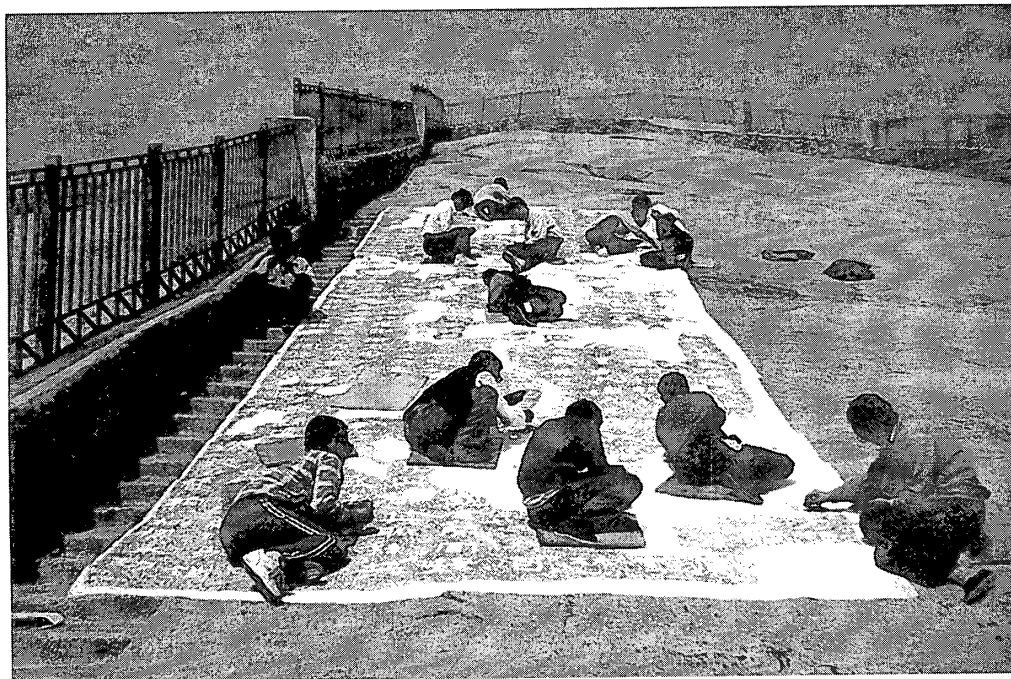
▲は眞韻
△は屑韻
○は洽韻

(10)

北齊歴史地図 武平三年(572)



(図表一) 山東の磨崖刻群



(図表二) 石頌部分採拓中(山東石刻藝術館篇『石頌』による)

2 不明文字の検討

△1は『四山摩崖刻経本一』（知識出版社刊）及び『石頌』（山東省石刻芸術博物館刊行）すべて、日字に釈しているが、経文からの引用文を意味するものと思われていた。

しかし、対する△2は亦字とも釈されるが、実は土（なべぶた、又はけいさんかんむり）は実は土で、さすれば赤字となる。これは摩崖の拓本等では下部は列火点の様にある。赤字が厳然として確認されれば右側は色名で白字となる。白字の第一画線が風化摩滅したことがある。

△3は拓本上結字の旁下部口が残存する。次句索字や「四毒□躬」の対語から結字となろう。四毒が己の身に結びついてしまう義である。

△4は欠字であるが、前句四毒から八疵となろう。

△5は熟と烈火が付される釈もあるが、文章上孰字が正しい。

△6の俞字は愈とも考えられる。上部人頭のみ判識可能。

△7は完全不明字であるが後句の鳳から推して龍字が考えられよう。

△8は挙から推して、騰字が考えられ、実際にその月偏は原拓にて確認可能である。

△9は、仏教礼賛から言って、佛が妥当と考えられるが、次句の対の排から拂字が正しい。

△10は、これも前句は前字でひるかえその意から却字が正しかろう。

△11は前句觀字、則ちみるから視、眺望の眺字があてられ、ながめる意となる。

△12は上字尤で尤最の熟語が妥当で、安法師の書法の技術が極めて、最高に高いことを意味しよう。

△13は次句の亀甲から、龍頭や身、角や鱗字等が考えられるが確定しがたい。

△14は瑩とする釈が多いが、意味上は瑩字が正しく、瑩とは別字である。

以下は序文で述べた『文教国文学』の不明字の研究で既に述べた。以上が今回研究してきた成果であるが、次に解釈考に移る。

3 釋読論考

(イ) 首行、曰字に惑わされて何かの経文の一節の断章とも考えてきた。しかし、白で、白泡以下の文章から清波、また赤字の字は雨冠のみ摩崖に残るので、(赤)霞、霧、又は露等が考えられる。今夏の調査は八月下旬で、日本は異常気象で冷夏であり多雨であった。中国も多雨であったが、よく外国人が泊する嶧鄰山荘 (ZHE LIN HOTEL・鐵山南面の小高い方向にあって鐵山をみわたせる) で、早朝に目がさめて外出してみると何と一面の霧で一メートル先は何も見えない。したがってその自然現象の不思議さに驚いたが、夕方は霞で、夕映えの朱霞等が見られた。いずれ、この鐵山の風景を言っているに相違ないと判明した。しかし、白泡青波や赤(霧)、朱霞、朱光も実体のないもので、すぐさま消滅しやすい。これは仏教の「夢幻泡影露電」を言っているものであろう。

『金剛般若経』中に「一切有為法、夢幻泡影の如し」とあるのに基づくものであろう。この鐵山の自然現象をも当然写していよう。(ロ)の四毒は普通衆生の善心を害する三つの煩惱三毒(貪欲、瞋恚、愚癡)等が考えられる。しかし後文で三乗が用いられるので、四毒としたのである。これは四大に関するものである。即ち宇宙の広範な万物、又人間を生成すべき四元素、地、水、火、風を言う。また四蛇とも関連し、地、水、火、風が相剋し、不調和なる状況を一つの箱に入れた四匹の蛇が互いに殺傷することに喩える。

四大からなる人間の業や病も地、水、火、風の調和の崩れたことに起因する。これをこれらの関連から四毒と『最勝王経五』から引用したもので、また当然自然界の地、水、火、風からの諸災害を受けることも人間である。

この前後、偶然にも、吾が国の仏足石歌碑の施頭歌に「四つの蛇、五つの鬼の集まれる、穢き身をば厭ひ拾つべし、離れ捨つべし」と詠われるところと意を同じくする。

四毒[◎]に対して、八疵[◎]は『莊子』—雜篇、漁父—に言う人間の八つ(摠、佞、諂、諛、讒、賊、慝、險)の欠点を言う。

且人有^二八疵^一、事有^二四患^一、不可^レ不^レ察也。非其事^二而事^レ之、謂^二之摠^一、莫^二之顧^レ而進^レ之、謂^二之佞^一、希^二意道^レ言、謂^二之諂^一、不^レ擇^二是非^一而言、謂^二之諛^一、好言^二人之惡^一、謂^二之讒^一、析^二交離^レ親、謂^二之賊^一、稱^二譽詐^レ偽以^レ敗^レ惡人^一、謂^二之慝^一、不^レ擇^二善否^一、兩容、頰^二適^レ偷^レ拔其所^レ欲、謂^二之險^一。此八疵者、外以^レ亂^レ人、内以^レ傷^レ身。君子不^レ友、明君不^レ臣。所謂四患者、好^二經^一大事^一、變^二更易^レ常、以^レ挂^二功名^一、謂^二之叨^一、專^二知擅^レ事、侵^レ人自用、謂^二之貪^一、見^二過不^レ更、聞^レ諫愈^レ甚、謂^二之很^一、人同^二於

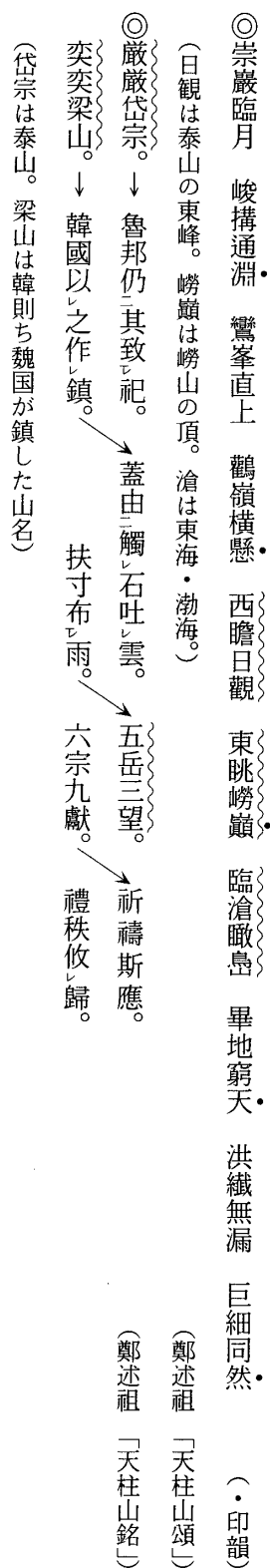
己_レ則可、不_レ同_レ於己_一、雖_レ善不_レ善、謂_レ之矜_△。此四患也。能去_レ八疵、無_レ行_レ四患、而始可_レ教已。(●印八疵、△印四患)

四毒も四患に関連しようか、禅学禅僧等、求道者がよく、仏教の言わんとするものが、『莊子』に通じ似かようと論断するが、この文章は仏典の抛典のみではなく、この様に『莊子』等にも深く関わるものである。

(ハ) は佛経上の喜捨善根を言うのであろう。その家財を割愛して、喜捨する。一種の布施の行為である。これらの浄財によって、この鐵山摩崖の刻經の鐫刻が可能になったのである。

(ニ) 瑕丘は春秋代の魯国、負魯をいう。伝統ある山東の国、鐵山の最も近くの有名な国名を基準に、前に郟嶧、則ち嶧山(秦始皇帝が「泰山刻石」よりも最初に「嶧山刻石」をものにし、『詩經』にも謳われた名山)。岱嶽は五嶽の筆頭泰山を言う。左右に昌巖、傳駅等のこの地の固有名詞をもって語る。これは金石碑文の漢代よりの名山等をたたえる碑文によくみられる常套的文辞である。今は紙幅の関係で詳細な具体を割愛するが、「西岳華山廟碑」、「封龍山碑」、「白石神君碑」等の碑文中にその名山を中心にした、東西南北の地名他の名山を記述する箇所がある。

因みに同じ山東の地に鄭述祖(？)五六五)が父道昭(？)五一六)を讃える「天柱山銘」や、「鄭文公上碑」下部の「四言詩殘刻」(別称「天柱山頌」)中にも次のように記述されているので挙げておこう。



こうみると、石頌中の記述も碑文の伝統というか、慣習に則ったものといえるのではなからうか。

(ホ) ここではこの「經文」の筆者の安法師の人格を先ず述べる。その佛教的信念の強さ、則ち道、学識、思想が高く、明識であ

る。高度の悟りの域に達し、人徳をそなえる東嶺安法師の溢美でない賛辞を以て簡潔に述べる。そしてそれを銜学するでもない。人に自慢、見せびらかす態度は皆無であり、むしろ秘し、則ち韜晦するのである。だから安法師の最も特技とする書にその精神の高い健筆を揮っていただき、先の大自然の風景よき地、則ち四頭の裏、良好な巖盤上に未来永劫まで輝ける筆跡にその精神を託して、大集經、穿菩提品九百三〇字を書いていただいたと石頌は言う。

漢代石碑より六朝隋唐と膨大な数の建碑、摩崖碑、土中への墓誌銘と民国時代の社会混乱中にも陸統として碑銘誌は刻される。中国文化の長い伝統ではあるこれらは金石諸碑の類で、古代初期から、その書の筆者名がわりあい軽んぜられていたのではなからうか。撰文者が上位で、書者が下位なのであろうか。伝統的に書者名は刻されない何かのいわれがあったものであろうか。が、しかし、書者名らしきものがいまよく問題にされるものがある。(撰文者か、書き手が明瞭ではないが……。)

◎漢の郿閣頌の碑陰の題名の、「仇緋、字子長、書此頌、(仇緋、字は子長、此の頌を書す。)」

◎西狭頌の題名の十二行の中に、「仇靖、字漢徳、書文、(仇靖、字は漢徳、文を書す。)」

◎華山廟碑の末の「遺書佐新豊郭香察書、(書佐の新豊の郭香をして察書せ遺む。)」——これは諸説がある。

◎石門銘の「梁秦典籤太原郡王遠書、(梁・秦の典籤太原郡の王遠書す。)」——撰文者か書手か。

◎江田船山古墳出土の大刀銘象嵌には、「作刀者名伊太朮、書者張安也。」(刀を作る者は名は伊太朮、書ける者は張安なり。)

等である。これらを見て、この「経文」も単に下方題名中央に「東嶺安法師署経」のみであったら、その意義も大きいかもしれないが、先述の諸例の範疇に終わってしまうであろう。

しかし、(ホ)は書者の人格まで及んでいる。それが神毫として昇華され書かれたことは、金石碑文中、その書と筆者の精神や人徳との関連を極めて長文に亘って触れているのが重要である。時代は下るが前記諸例よりはるかに進展した記述と言わざるを得ない。また、その結果、短韻(いわゆる銘や辞に相当しよう)中に、(チ)の様に

「その書蹟の清越なることを王羲之(三三二〜三七九?)や韋誕(一七九〜二五三)よりも超絶しており、その妙えなることは伯英

(後漢) や鍾繇(二五一—二三〇) よりもはるかに越えており、それはまるで龍が霧にわだかまり、鳳が天空に雄姿している様だ。過去の有名書法家の四人よりも評価を高めている。極めて高度な書法意識の高い碑石文といえるのではなからうか。

又安法師についての頌徳的な短文ではあるが、洪頂山に摩崖碑として、近年発見されたひかえめな文章がある。次に挙げておく。

大沙門僧安又名道耆、广大郷□□里人也。□□□□、若積石之千峯、八体罔並、崆峒之萬嶺。雖嶢道德。器度風流。乃為詞曰、
 鍾罽罍□、□回磨義、石石鑿銘、山山□□、□□林□、千□□□。——安道耆題名記——〈洪頂山・北嶺南崖〉

石頌文は書法的な記述ばかりではなく、至る所に佛教に関わり、また説教的な箇所が随處に窺えるのは一目瞭然である。例えば、

(へ) は釈尊のジャータカで、生前の尸毘王^{シビ}であったとき、鳩の肉と同じ量の自分の肉を切り取って鷹に与えたとされる物語である。鷹は尸毘王を試す帝釈の仮の姿ともいわれ、これは北方所伝という。これらが短文中に何気なく語られ、さらに、

(ト) 六度(六波羅密のこと。菩薩に課せられる①財施・法施・無畏施、②戒律、③忍辱、④精進、⑤禪定・冥想、⑥智慧、悟りを完成さす)が常に満ちている。三空(空解脱、無相解脱、無作解脱門、即ち煩惱の繫縛を脱して証悟の境に至る方法のこと)が欠けることがない。

三、結 論

この鐵山摩崖の全体像の把握が幸いに今夏の実査を得て出来、又三階の路までも確認できた。「経文」の検討は語釈程度であるが、序文でふれた論文に詳しいところも有るのでそれらに譲る。「石頌」の文章は佛教漢文上、発展上、又書道金石学上、他が及ぶことのない独自の書法分野についての記述をもつ碑文であることが解明されたであろうと思われる。経文・石頌を今後は更に詳細に研究していきたく思う。

四、参考文献

- 一、劉熙載の人物游藝約言評釋 相川鉄崖 文化書房博文社
とその書物
- 一、註解名蹟碑帖大成 藤原楚水 省心書房
- 一、書の本 布川角左衛門 筑摩書房
- 一、中國石刻大觀 奉公 同朋舎出版
- 一、石頌 中国山東省石刻芸術博舘主編
- 一、中国書道辞典 中西慶爾編 木耳社
- 一、仏教事典 中村元等、岩波書店
- 一、修美 通卷第四十、四十一号 修美社
- 一、中国山東省歴史文物展図録 相川政行監修 大塚巧藝社
- 一、古碑積文 樋口銅牛 晚翠軒
- 一、莊子 新釈漢文大系 8 遠藤哲夫 明治書院
- 一、巨大なる摩崖刻経 坂田玄翔 多胡碑記念館
- 一、天柱山四言詩殘刻の研究 I、II 相川政行 東京学芸大学紀要
- 一、鄭述祖「天柱山銘」の研究 I、II 相川政行 東京学芸大学紀要
- 一、鄒県誌 婁一鈞 乾隆年間版

二〇〇三年一〇月一日受理、一二月二日採択